

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月29日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720107

研究課題名（和文） ロシア・ウクライナ・ベラルーシにおける歴史小説の比較研究

研究課題名（英文） Comparative Study on Historical Novels in Russia, Ukraine and Belarus

研究代表者

越野 剛（KOSHINO GO）

北海道大学・スラブ研究センター・助教

研究者番号：90513242

研究成果の概要（和文）：

ロシア・ウクライナ・ベラルーシにおける様々な歴史記憶が、現代にまでいたる国民文化の形成に果たした役割を研究した。具体的には、ナポレオンのロシア遠征における冬將軍の神話、イヴァン・スサーニンやステンカ・ラージンの英雄像、チェルノブイリ原発事故、サハリンの流刑地の歴史を取り上げ、複数の国民文化における記憶と表象のありようを比較分析した。

研究成果の概要（英文）：

Our research project has studied the cultural processes within which various historical memories serve to form national identity in Russia, Ukraine, and Belarus. Specifically we analyzed the historical myth of the *Winter General* in Napoleon's Russian Campaign, heroic historical figures such as Ivan Susanin and Stenka Razin, the cultural implications of the Chernobyl disaster, and the historical identification of Sakhalin as a penal colony, comparing the similarities and differences of historical memories between these national cultures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア東欧文学、ウクライナ、ベラルーシ、記憶、歴史小説、戦争、チェルノブイリ、サハリン

1. 研究開始当初の背景

歴史人物や事件の受容の変遷を文学作品、絵画、映画、記念碑などに依拠して研究する記憶史の方法が近年発達しており、歴史学者と文学研究者の双方が参与して「文化史研究」のひとつの潮流を形成している。日本では見市雅俊他編著『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』（1999年）やピエール・ノラ

『記憶の場』の翻訳（2002-2003年）の影響が大きい。研究代表者はこれまでロシア文学におけるナポレオン戦争、ベラルーシ・ウクライナ文学とチェルノブイリ事故といった文学と歴史的記憶に関わる研究を行っており、主として西欧文化史の枠組で展開してきた記憶やコメモレイション研究の手法をロシア東欧地域に適用することを意図した。科

研申請時には欧米で David L. Ransel and Bozena Shallcross 編著 Polish Encounters, Russian Identity (2005年)といった研究書も出ている。

18世紀末から19世紀初頭にかけてのナポレオン戦争の時代がヨーロッパ各地でナショナリズムの高揚と結びついたことはよく知られている。同じころにスコットランドの作家ウォルター・スコットは歴史小説ジャンルのブームを呼び起こし、ギリシア・ローマの古典古代だけではない、各民族独自の歴史を発見することを促した。ヨーロッパの文化史において歴史小説は大きな意義を持っていると言える。しかしロシア文学研究において、歴史小説は低俗なジャンルと見なされて十分な研究が行われてこなかった。それに比べるとウクライナ・ベラルーシでは歴史小説に高い位置づけが与えられていたが、そもそも両国の文学は国際的な研究の場で取り上げられることが少なかった。ましてや三国の歴史小説を比較する試みはこれまでなかったものである。

2. 研究の目的

ロシア・ウクライナ・ベラルーシは東スラヴ語族に属し、歴史的にはキエフ・ルーシ国家にさかのぼる共通の起源を有する。しかし13世紀以降はリトアニアとポーランドの政治的文化的な影響下におかれ、18世紀のポーランド分割によってロシア帝国に「再統合」される(ウクライナの一部はオーストリア領)。ベラルーシ・ウクライナの民族的覚醒が始まるのはナポレオン戦争を経て19世紀に入ってからである。ロシアにおいても西欧化した貴族知識人が民衆の中にロシアの民族性(ナロードノスチ)を発見し始めるのは同じころだった。したがってポーランド分割からナポレオン戦争にかけての時代(18世紀末から19世紀初頭)に着目して、ロシア・ウクライナ・ベラルーシにおける歴史小説ジャンルの形成を念頭において研究を行う。主として以下の三点を明らかにすることを目的とする。

(1) ロシア・ウクライナ・ベラルーシの歴史小説ジャンルにおいてナポレオン戦争とナショナリズム高揚期の諸事件がどのように描かれているかを比較しながら明らかにする。各言語による歴史小説ジャンルの成立の歴史も明らかにする。

(2) 上記の時代に確立された歴史イメージが現代の文学、映画、ジャーナリズムの歴史叙述においてどのように用いられているかを調査する。ロシア革命、第二次世界大戦、チェルノブイリ原発事故、ソ連崩壊といった現代史の事件を描く際に、過去の記憶が呼び起こされ、利用されるプロセスを研究する。

(3) 歴史小説というこれまであまり研究されてこなかったジャンルの系譜を隣接する

複数の言語文化間で比較することにより、国家間で歴史に対する共通の認識が得られる、あるいは得られなくなるプロセスを明らかにする。例えば日中韓における歴史認識の相違といった問題を考えるための材料を提供する。

3. 研究の方法

歴史小説のテキストが書かれた時代について19世紀・ソ連期・現代の三段階に分けて研究を行う。ウクライナ・ベラルーシ文学、およびロシアの歴史小説については日本国内で手に入る文献が少ないため、現地での資料収集を行う必要がある。

(1) 初年度は帝政ロシア時代の歴史小説ジャンルを比較研究する。1830年代に始まるロシアの歴史小説については先行研究も多い。ここでは研究の少ない19世紀後半のロシアの歴史小説(ダニール・モルドフツェフ、グリゴリー・ダニレフスキーなど)に着目して、そこに見られるウクライナ・ベラルーシの描写を分析する。パンテレイモン・クリシの『黒いラーダ』(1846年)に始まるウクライナの歴史小説についても研究する。

(2) 2年目はソ連期に焦点を当てる。とりわけスターリン期の1930-50年代(コンスタンチン・オシポフ、レフ・ニクリンなど)およびブレジネフ期の1960-70年代(プラト・オクジャワ、ヴァレンチン・ピクリなど)の二つの歴史小説ブームを対照しながら、ナポレオン戦争を中心にして共通するモチーフを比較研究する。20世紀初頭から始まるベラルーシの歴史小説(マクシム・ハレツキー、ウラジミル・カラトケヴィチなど)についても比較研究する。

(3) 3年目はソ連崩壊後のロシア・ウクライナ・ベラルーシにおいて、ペレストロイカが19世紀のアレクサンドル2世の大改革と比較されたり、ソ連崩壊後の混乱が17世紀ロシアの動乱(スムータ)に譬えられたりするように、現代史の諸事件が過去の歴史との類推で語られる現象に着目する。とりわけチェルノブイリ原発事故の言説を現代文学やルポルタージュを題材にして分析する。これまでの研究の総括を行い、現代におけるロシア・ウクライナ・ベラルーシの歴史意識の総合的比較を試みるとともに、研究成果の発表を積極的に行う。

4. 研究成果

ナポレオン戦争やチェルノブイリ事故などの記憶と歴史小説に関して研究を行った。その成果は以下の4点にもとめることができる。当初の計画にはなかったコサックやサハリンといった新たな要素を歴史小説研究に取り入れることができた。しかしロシアやベラルーシと比べてウクライナについて十分な

成果を上げることができなかったことが反省される。今後はウクライナ移民とサハリンやコサックとの関係について研究を深めていきたい。

(1) ナポレオンのロシア遠征(祖国戦争)がロシアの歴史的記憶に残した影響を、冬の寒さのイメージ(冬将軍)やイヴァン・スサーニンの英雄像を題材にして明らかにした。2010年9月にはスサーニンの記憶の残るコストロマ市およびヴォルガ上流地域の現地調査を行った。2011年8月に北京で開催された第3回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会では、ミラノ大学のレベッキーニ教授、千葉大学の鳥山准教授を招いて、ナポレオン戦争とロシア文化に関するパネルを組織した。また野中進他編著『ロシア文化の方舟』(2011年)において成果の一部を発表した。

(2) チェルノブイリ原発事故と第二次世界大戦がベラルーシの歴史的記憶や国民形成に果たした役割を明らかにした。この分野は学術振興会特別研究員(2005-2007年)のテーマを引き継いだものだが、ロシア・ウクライナ・ベラルーシ三国における歴史小説ジャンルの生成という広い文脈から論点を整理し直すことができた。成果の一部は2010年7月にストックホルムで開催された国際中東欧研究学会で報告した。また2011年の東北震災と福島原発事故を受けて企画された日本比較文学会東北支部・北海道支部の合同研究会でも報告を行い、原発事故の比較を考える材料を提供した。

(3) サハリン文学における流刑地とチェーホフの滞在という歴史的記憶の変容過程をソ連時代の文学を中心に明らかにした。2009年度にはサハリンで現地調査を行い、ウクライナ・ベラルーシからの移民が果たした役割について資料収集した。原輝之編著『日露戦争とサハリン島』(2011年)において成果の一部を発表した。

(4) ドン・コサックのステンカ・ラージンの形象、とりわけペルシャの姫がヴォルガ川に投げ込まれるモチーフを19世紀ロシアおよびソ連時代の歴史小説を題材にして研究した。2011年8月にはラージンゆかりの地アストラハンなどヴォルガ下流地域で現地調査を行った。2010年3月にはソウルで開催された第2回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会で研究成果の一部を報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①越野 剛、「戦争の記憶とナロードの英雄—イワン・スサーニンの物語」、野中進他編著『ロシア文化の方舟』(東洋書店)、2011年、

240-248頁、査読無

②越野 剛、「二十世紀ロシア文学におけるサハリン島—チェーホフと流刑制度の記憶」、原輝之編著『日露戦争とサハリン島』(北海道大学出版会)、2011年、129-155頁、査読有

[学会発表] (計12件)

①越野 剛、「チェルノブイリ原発事故とベラルーシの文学—放射能汚染地の描写を中心に」、日本比較文学会北海道支部・東北支部共催研究会、2012年3月17日、北海学園大学(札幌市)

②越野 剛、「ポーランド文学における「ベラルーシ派」—ヤン・バルシュチェフスキを中心に」、日本西スラヴ学研究会、2012年3月15日、北海道大学(札幌市)

③越野 剛、「ナポレオン戦争におけるマロース(冬の寒さ)の表象」日本ロシア文学会研究発表会、2011年10月8日、慶應義塾大学日吉キャンパス(横浜市)

④Go Koshino、Images of China in Russian Literature、International Conference “Comparative Aspects on Culture and Religion: India, Russia, China”、2011年9月15日、バンガロール文化社会研究センター(インド)

⑤Go Koshino、Образ Китая в современной русской литературе(現代ロシア文学における中国のイメージ、ロシア語)、中国ロシア文学会シンポジウム「ロシア文学—伝統と現代性」、2011年9月11日、北京外国語大学(中国)

⑥Go Koshino、Представления о «Холодной» войне в литературе и карикатуре(ナポレオン戦争の文学とカリカチュアにおける寒さの表象、ロシア語)、East-Asian Conference for Slavic Eurasian Studies、2011年8月28日、北京ランドマークホテル(中国)

⑦Go Koshino、The Chernobyl Disaster in Contemporary Belarusian Culture、ICCEES(International Council for Central and East European Studies) VIII World Congress、2010年7月28日、ストックホルム市庁舎会議場(スウェーデン)

⑧Go Koshino、Ladies Thrown into Volga: Literary Image of Sten'ka Razin、East-Asian Conference for Slavic Eurasian Studies、2010年3月4日、Hotel Seoul Kyo Yuk Mun Hwa Hoe Kwan(韓国)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況（計0件）

〔その他〕
ホームページ等
無し

6. 研究組織

(1)研究代表者

越野 剛 (KOSHINO GO)
北海道大学・スラブ研究センター・助教
研究者番号：90513242